令和５年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 桜木 小学校 ）　　学校番号　０４７

【様式】

目指す学校像	「認めて育てる」教育を推進する

重点目標	
	１　学ぶ楽しさ、喜びが味わえる授業（学習指導）の実践 ２　安心・安全で心豊かな学びを保障する教育環境の充実 ３　家庭・地域・関係諸機関との連携による教育の推進（コミュニティ・スクール） ４　一人ひとりが力を発揮し、誰もが居心地のよい（Well-Being）学校をつくる教職員研修の充実

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和６年２月２２日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査では、国語、算数ともに全国、県平均と比べ概ね良好な結果である。 ○市の学習状況調査において、「学習に対する関心・意欲・態度」に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均と比べ理科、算数、社会でやや高く、国語、G・Sでやや低い。 ○児童のＩＣＴ能力が高く、日頃の学習では意見交換や調べ学習等でタブレット型コンピュータを積極的に活用して学びに向かう児童が多い。 〈課題〉 ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、習熟の二極化と、根拠や理由など自分の考えを表現することに苦手意識をもっている児童が多い。 ○学習内容の理解度に比べると学習への興味・関心が十分に高まっておらず、児童が学習の意義を実感できるようにすること、達成感や充実感を味わえるようにすることが課題である。	・基礎基本の定着と学びの自律化に向けた情報端末の活用、授業改善	①授業では児童と必要感のある課題を提示し、自ら解決の見通しをもたせるとともに、ＩＣＴを活用した自己の学びを振り返る時間（記録の蓄積）を設定し、児童が自己の課題を把握できるようにする。 ②ＩＣＴを効果的に活用し、自分の思いや考えを表現する力を高めたり、児童同士で意見等を共有して表現したりする授業を進める。	①各種学習状況調査の学習に関する質問項目において、８０％以上の肯定的な回答が得られたか。全国学力・学習状況調査における質問項目「課題解決に向けた取組」において、８５％以上の肯定的な回答が得られたか。 ②学校評価項目「授業内容・発表・質問」の児童の達成率や市学習状況調査の学習に関する肯定的な回答率の割合が共に８５％以上となったか。	①市学習状況調査の学習に関する項目（高学年の５教科平均）において、８１％の肯定的な回答が得られた。また、全国学力・学習状況調査における質問項目「課題解決に向けて、自分で考え、取り組む」において、９９％の肯定的な回答が得られた。 ②児童の学校評価項目「授業内容・発表・質問」において平均８７％、市学習状況調査の質問項目「ＩＣＴ活用・表現」において平均９６％の肯定的な回答が得られた。	A	・次年度も、個々の児童の実態に即した学習指導・支援を適切に継続していくことが大切であると考える。そのために、「学びの指標」を生かした授業の達成状況について各教員が客観的に振り返り、授業力向上を図りたい。また、教員個々のＩＣＴ活用能力の向上や、今年度の学校課題である「個別最適な学び」に関する研究をさらに深めていきたい。	・全国学力・学習状況調査において全国・全市の平均を上回っているのは、取組の成果が表れていると言える。習熟の二極化とならないよう、苦手意識のある児童への支援を大切にしてほしい。同時に、学力上位の児童を伸ばす手立ても講じていく必要がある。 ・先生方の指導や各家庭の協力で、児童のＩＣＴ能力が育まれていることが分かる。デジタルとアナログのバランスを大切にしてほしい。次年度以降も、STEAMS 教育や SDGs 教育、金融経済教育等、児童が学ぶ楽しさを実感できるような教育を進めてほしい。
		・一人ひとりの Well-Being を大切にする「未来の教育」づくり（学び方・教え方・働き方の向上）	①実社会で新しい価値を生み出す力を育むため、実態に即した STEAMS 教育、SDGs 教育の見直しを図り、教育活動全体を通した指導計画を作成する。 ②全国学力・学習状況調査や市学習状況調査等の結果分析、学校課題研修、学校カウンセリング研修等を通して、教員の授業改善を進める。	①学校自己評価の教員アンケート「問題解決的な学習指導、児童の興味関心を生かした学習指導」において８０％以上の肯定的な回答が得られたか。 ②学校自己評価の教職員アンケート「よい授業・個に応じた指導等」（４項目）において、「強くそう思う」回答が２５％以上になったか。	①学校自己評価の教員アンケートの設問「体験的な学習、問題解決的な学習指導、児童の興味関心を生かした学習指導」において１００％の肯定的な回答が得られた。 ②学校自己評価の教職員アンケートにおける「よい授業・個に応じた指導等」（４項目）において、「強くそう思う」と回答した割合が２９％であった。	A	・実態に即したカリキュラムマネジメントを進める中で、学習に対する児童の興味関心を高めることができた。次年度は、子どもたち自身がよりよく生きていくことについて主体的に考える力を育成するために STEAMS 教育や SDGs 教育の見直しと「金融経済教育」の充実を図る。	
2	〈現状〉 ○市学習状況調査で、設問「学校に行くのが楽しい」に肯定的な回答をした児童の割合は高く、設問「自分にはよいところがある」では低い。 ○毎日の保健室の利用状況は平均１０人程度でけがと病気の割合が５：５（けが：病気）となっていて決して低い値とは言えない現状である。 〈課題〉 ○昨年度、教職員間で「認めて育てる」という方針を具体化・共通理解できたことで、自尊感情の高い児童が増加したが、学年・学級で指導や声かけ等にバラツキがあることも事実である。 ○児童は事故やケガ防止の当事者意識が低く、「健康について関心はあるが、ケガや病気を未然に防ぐ」という点について児童の自覚や、教職員の指導の在り方等に課題がある。	・自己肯定感を育む、児童一人ひとりへの細やかな教育支援・相談に向けた校内体制の充実	①年度当初に「元気アッププロジェクト」について全教職員で共通理解を図り、教職員の個性や持ち味を生かした活気ある教育活動を推進する。 ②教育相談に係る校内委員会でＩＣＴを活用することで、蓄積した情報（面談記録等）を基に児童の状況を細やかに把握・分析し、適切なタイミングで組織的に支援・相談を行う。	①学校自己評価の児童アンケートや市学習状況調査「生徒指導・自尊意識」において、関連する項目の肯定的な回答の割合が８５％以上となったか。 ②学校自己評価の教職員アンケートの項目「教育支援・相談」において平均９０％以上、保護者アンケートの項目「家庭への連絡」において８０％以上の肯定的な回答が得られたか。	①児童の学校評価項目「ほめてくれる」において９６％の肯定的な回答が得られた。市学習状況調査「自分には、よいところがある」では、昨年度より１％向上した。 ②学校自己評価の教職員アンケートにおける「教育支援・相談」（８項目）においては平均９９％、保護者アンケートにおける設問「家庭への連絡」においては８９％の肯定的な回答が得られた。	A	・児童の自己肯定感を育むため、次年度も「元気アッププロジェクト」により教職員の個性や持ち味を生かした教育活動を推進する。スクールダッシュボードや定期的なアンケート・面談の実施、Sola るーむの効果的運営により、児童の状況を細やかに把握・分析し、適切なタイミングで組織的に支援・相談を行いたい。	・「認めて育てる」教育の推進が結果として表れている。児童のよさや努力を認めることや自己肯定感を高める取組を今後も継続していってほしいが、「褒める」と「叱る」のバランスが大切である。 ・次年度も「元気アッププロジェクト」で教職員の個性や持ち味を生かした特色ある教育活動を行い、すべての児童にとって魅力ある楽しい学校運営を推進していってほしい。 ・児童の安全・安心のため、今後も学校・家庭・地域で児童を見守っていきたい。
		・清潔、安心安全な居場所づくりと児童の自己管理能力を育む各種取組の充実	①清掃活動の参加・見守りや交通安全指導、ケガが起きやすい場所等の提示、情報端末を活用したケガの発生場所や原因等の分析・共有を行う。 ②生徒指導委員会や児童会（高学年）を中心に廊下歩行・右側通行や、清掃活動の徹底を図る。	①学校自己評価の保護者アンケートで、「安全できれいな環境づくりに取り組んでいる」の「十分満足できる」回答が４０％以上になったか。 ②学校自己評価の保護者アンケートの設問「健康安全の指導」の「十分満足できる」回答が３５％以上になったか。	①学校自己評価の保護者アンケートにおける設問「環境を整え、安全できれいな環境づくりに取り組んでいる」の「十分満足できる」と回答した割合が３６％であった。 ②学校自己評価の保護者アンケートにおける設問「健康安全の指導」の「十分満足できる」と回答した割合が３４％であった。	B	・学校生活で大きなケガや事故がなく、安全に教育活動を行うことができた。校内けがマップの活用等を進め、事故やけが防止の当事者意識を育んでいく。また、児童・教職員共に整理整頓の意識を高め、きれいな環境づくりに取り組んでいきたい。	
3	〈現状〉 ○昨年度コミュニティ・スクールに関する情報を本校ＨＰで発信するとともに、１２０周年記念行事に係る取組等から学校・家庭・地域全体との結びつきを強めることができた。 〈課題〉 ○育成会や周年行事等を通して児童と地域との絆を深め、顔の見える関係がつくれたことを実感している。児童と地域が繋がる場を広げ、学校の取組の周知も含め、学校と地域が協働して「地域総がかりの教育」を実践していきたい。 ○挨拶等を通して顔の見える関係づくりを進め、学校と地域、関係する諸団体との結びつきを確かなものにしていく。また、地域全体の望ましい人間関係づくりや地域教育力の向上を目指し、児童を守る防犯・防災体制も整えていく。	・目指す児童像を地域全体で共有するためのＩＣＴ活用、教育活動公開	①各種ボランティアや地域諸団体による協力や、本校ＨＰを通して学校運営協議会及びＳＳＮの情報を発信して学校の様子等を家庭、地域と共有する。 ②運動会の充実や、地域懇談・育成会等への参加、地域の方を招いた給食試食会の実施等を通して、学校の情報提供と共に、要望等にも耳を傾ける。	①学校自己評価の保護者アンケートで、「学校や地域の特色を生かした教育活動に取り組んでいる」と回答する割合が８０％以上となったか。 ②学校自己評価の保護者アンケートで、「保護者や地域の方々に学校を知ってもらう努力をしている」と回答する割合が８５％以上となったか。	①学校自己評価の保護者アンケートにおける設問「学校や地域の特色を生かした教育活動に取り組んでいる」に肯定的に回答した割合が９２％であった。 ②学校自己評価の保護者アンケートにおける設問「保護者や地域の方々に学校を知ってもらう努力をしている」に肯定的に回答した割合が９７％であった。	A	・運動会を含む各学校行事や親子夕涼み会、３世代ふれあいフェスタ等を通して児童と地域が繋がる場を広げることができた。次年度も引き続き、本校ＨＰを通して学校運営協議会及びＳＳＮの情報発信を適切に行いながら、児童や学校の様子等を家庭・地域と共有していく。	・運動会や音楽会、親子夕涼み会や３世代ふれあいフェスタ等、５類感染症移行後に充実した取組ができた。次年度以降も、コロナ渦前の活動に全て戻すのではなく、これまでの取組内容を精選して実施していくことが大切である。 ・教育相談の充実や「Sola るーむ」の効果的運営に向けて、整備・周知を進めてほしい。全ての児童が安心して通えるよう引き続き見守っていく。 ・今後もコミュニティ・スクールの取組も含め、様々な形で情報発信をしていくとよい。
		・トラブル等における適切な対応と地域総がかりによる挨拶を通した地域教育力の向上	①報告・連絡・相談・確認の徹底を図り、いじめや問題行動に対して、迅速かつ丁寧に対応し、チーム桜木の組織対応を図っていく。 ②学校運営協議会で「挨拶を交わし、活気ある地域づくり」の熟議を行う。挨拶運動や「心を潤す４つの言葉」を徹底できるよう朝会等で呼びかける。	①学校自己評価の保護者アンケートで、「子どもや保護者の悩み、トラブルについて、適切に対応している」と回答する割合が８０％以上となったか。 ②学校自己評価の保護者アンケートで、「あいさつが進んでできる児童の育成に努めている」と肯定的に回答する割合が８５％以上となったか。	①学校自己評価の保護者アンケートにおける設問「子どもや保護者の悩み、トラブルについて、適切に対応している」に肯定的に回答した割合が８６％であった。 ②学校自己評価の保護者アンケートにおける設問「あいさつが進んでできる児童の育成に努めている」に肯定的に回答した割合が８６％であった。	A	・子ども・保護者の悩みやトラブル、いじめや問題行動等に対して家庭やssw、sc と連携しながら、迅速かつ丁寧に対応することができた。次年度も教育相談日・週間の効果的活用、働き方改革を通した児童と向き合う時間の確保、全教職員の「模範となる挨拶と呼びかけ」を進めていきたい。	
4	〈現状〉 ○日常的にＩＣＴを活用する姿がみられるようになり、昨年度１月には都道府県・市教委等の視察対応で全学級が授業公開を行った。 ○高学年教科担任制により、担当教科における深い教材研究を行うことができている。 〈課題〉 ○ＩＣＴの効果的な活用方法については、エヴァンジェリストが中心となり検討・周知していく。また、誰もが学び続けることのできる職場環境づくりが求められる。	・一人ひとりが力を発揮し、学校に集う誰もが居心地のよい（Well-Being）学校をつくる研修の充実	①年間を通して学期に１回以上、ＩＣＴの活用方法について、全ての教員が学ぶ研修を実施する。 ②高学年教科担任制により複数教員で学年児童の様子を多面的にとらえるとともに、各教科の専門性を高めることで児童理解と授業改善を行う。 ③授業改善に向けて教員が目標を設定して、「全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学び」に関する実践に取り組む。（１人１授業の実施）	①学校自己評価の教職員アンケート「視聴覚教材の活用」において９０％以上の肯定的な回答が得られたか。 ②学校自己評価の児童アンケート（高学年）で、「授業の内容が、よくわかる」と肯定的に回答する割合が９０％以上となったか。 ③全ての教員が授業改善を行い、学校自己評価の教職員アンケート「研修」項目で、「強くそう思う」回答の割合が２２％以上となったか。	①学校自己評価の教職員アンケートにおける設問「視聴覚教材の活用」に肯定的に回答した割合が１００％であった。 ②学校自己評価の児童アンケートにおける設問「授業の内容が、よくわかる」（高学年児童のみ）においては９８％の肯定的な回答が得られた。 ③研究発表会の開催や、各自で授業を行い、実践報告を作成した。学校自己評価の教職員アンケート「研修」項目で、「強くそう思う」回答の割合が２２％であった。	A	・次年度は、スクールダッシュボードを含めＩＣＴの効果的な活用方法について、エヴァンジェリストが中心となり検討・周知していく。教職員が力を発揮し、「やりがい」をもって子どもと向き合えるよう、校内研修や学年会の中で、学級経営や教科指導等における個々の悩みや課題等を適時共有し、主体的な研修の充実を図りたい。また、教員の得意を生かした教科担任制を実施していく。	・スクールダッシュボードを効果的に活用して、児童、保護者、教職員にとって意義のあるものにしてほしい。働き方改革の視点を大切にしながらも、全教員の学級経営力・授業力の向上に期待している。 ・次年度以降も、一人ひとりが力を発揮し、誰もが居心地のよい（Well-Being）学校づくりを進めていってほしい。